

## 山口県に住んで18年

山口大学工学部

松田 好晴

昭和四十七年から山口大学に勤務することになってはや十八年が過ぎた。この間に我国の電気化学も発展し、随分変わったと思う。しかし、世の中も大きく変わった。

まず人々の気持ちが変わった。山口県も昭和四十年代の後半は地方の時代とか言って上昇気運があったが、今では人口もやや減少気味で何となく寂しい雰囲気である。

ところで本年の日本の十八歳人口は二百二十万人台であるが、十八年後には百二十万人台になることが予想されている。その頃には、大学や企業や日本の社会はどのようになっているのであろうか。大きな問題である。最近では女性一人が出産する赤ちゃんの数が一・五七人とか、急激な一層の人口減少が予想されている。結婚しない若者や子供をつくらない家庭の増加が直接の原因であるが、間接的には教育費の増大、住居の狭さ、育児の大変さなどが原因として新聞などに書かれている。

かりに今、子供が生まれても成人になるのは二十年後、人間を育てるのは木を育てることより難しい。しかし、子供をつくらずに人生を終わるのは山の木を伐って後、殖林しないのと似ている。特別の場合は例外として、一般には子孫の繁栄のもとをつくるのが人間に負わされた役目であることが自覚されなければならない。

それにしても、男性も女性も、子供を育てながら社会的に十分に活躍できるように家庭生活も仕事の勤務形態も、また保育所の完備や教育費の社会負担などの社会の仕組みの多くを改めるときに来ているように思われる。

山口県に住むことになって十八年、これからは更に早く色々がことは変わっていくような気がする。しかしその変わり方は、その時点での経済的効率の上昇を求めるのみでなく、個人個人の幸福や健康で明るくて、子供もいる楽しい家庭が成り立つものであって欲しいものである。